

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月 4日現在

機関番号：12612

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520524

研究課題名（和文）依頼の言語行動と「遠慮・察し」の意識

研究課題名（英文）Language Behavior of Making Requests and Attitudes Concerning “Enryo” and “Sasshi”

研究代表者

池田 裕（IKEDA YUTAKA）

電気通信大学・国際交流センター・教授

研究者番号：60184438

研究成果の概要（和文）：本研究は、日本語における「依頼」の言語行動に焦点を当て、母語話者と学習者の発話を比較することにより、母語別のグループの形態的・量的特徴を明らかにした。さらには、日本のコミュニケーションの特徴とされ、「依頼」に大きく関わる社会文化的意識として、「遠慮・察し」の意識をはかるための「遠慮・察しコミュニケーション尺度」を開発し、母語別のグループで意識がどのように違うかをアンケート調査から明らかにしてきた。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the language behavior of making requests in Japanese by native and nonnative users of the language. By comparing utterances produced by native and nonnative speakers, the study identified formal and quantitative features of request-making by language group. Furthermore, the investigators developed a "Japanese Enryo-Sasshi Communication Scale" to measure to what extent the participants' perceptions of their language behavior support enryo and sasshi, sociocultural concepts that are widely recognized as characteristic of Japanese communication style and are closely related to request-making, and elucidated differences in orientation to enryo and sasshi by language group.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：異文化コミュニケーション・異文化理解・言語行動

1. 研究開始当初の背景

(1) 「依頼」は母語話者にとっても容易とは言えない言語行動であるが、異なる社会文化的規範を持つ学習者にとってはさらに困難

が伴う。日本語教育の教科書における丁寧な依頼表現は、ほとんどの場合「～していただけませんか」「～していただけませんか」等にとどまっている。そうした依頼表現は、談話完成法 (Discourse Completion Test)

を用いた筆記データを分析してみると、日本語学習者からだけではなく日本語母語話者においても多く見られる。また、言語行動の談話を分析する研究は、国内・海外を問わず、談話完成法による筆記データをもとにしているものが多い。しかし、母語話者の言語行動を発話でみると、「～お願いできないかと思って、伺ったのですが…」等のより間接性の高い表現が多く使用されていることがわかる。従って、言語行動の分析には実際の発話を通じたデータの分析が必要であるが、そうした分析はあまり行われていない状況であった。

(2)「遠慮・察し」は、相手に配慮した曖昧なメッセージのやり取りで機能し、調和的対人関係を志向する日本人のコミュニケーションの特徴の一つとされる。相手に配慮する必要性が高い依頼の言語行動にも深く関わると考えられる。「遠慮・察し」に関しては、多くの概念的な質的研究は行われてきているが、実態を調査する量的研究は行われていなかった。また、「遠慮・察し」が日本人のコミュニケーションに特徴的にみられるものであるとしても、それが文化一般的にどの程度あてはまるかという視点からの比較研究も行われてきていなかった。

2. 研究の目的

(1)日本語母語話者と日本語学習者の依頼の言語行動の発話データをロールプレイにより収集し、情報提供発話及び依頼発話を形態的、量的に分析し、その特徴及び習得上の問題点を明らかにする。

(2)「遠慮・察しコミュニケーション」を支持する度合いを測るための項目を先行研究から選定し、「遠慮・察しコミュニケーション尺度」を開発し、日本人に対してアンケート調査を行うと同時に、日本語以外を母語とする集団にも調査を行い、比較対照する。

(3)「依頼」の意識と関わる調査項目の結果と「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の調査結果との間にどのような相関がみられるかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1)「依頼」の言語行動を明らかにするため、ロールプレイによる調査方法を確定し、日本語母語話者、および、日本語学習者から発話データを収集し、文字化する。

テキスト化されたデータを分析し、依頼の言語行動の談話構造、〈情報提供〉、〈依頼〉表現について、母語話者と学習者の差異を明ら

かにする。

(2)「遠慮・察し」の意識を調査するために、「遠慮・察しコミュニケーション尺度」を確定し、さらに依頼の意識を調査するための項目を作成する。そして、中国語、韓国語、英語に翻訳する。

アンケート調査を行い、統計的手法による信頼性の検証、及び、既存尺度との結果比較による妥当性の検証を行う。

(3)上記、調査の結果から、依頼の言語行動および「遠慮・察し」の意識を検討し、社会的文化的により現実に即した日本語における依頼の談話を明らかにし、日本語教育にその知見を還元する。

4. 研究成果

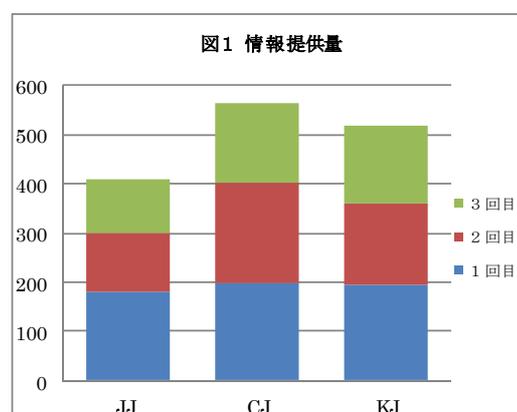
(1) 依頼談話

依頼談話は、依頼の負担度の異なる二つの状況を設定し、ロールプレイを行い、発話データを収集した。日本語母語話者40名と中国人日本語学習者40名、韓国人日本語学習者40名のデータ（以下、それぞれJJ、CJ、KJとする）を分析した。

依頼談話の全体的構造を分析すると、日本語母語話者の場合、被依頼者からの断りがあるたびに情報提供と依頼の発話が繰り返されることが特徴となっている。以下に、母語話者と学習者グループの差異についてまとめる。

① 情報提供について

情報提供は、依頼が直接的に述べられる依頼発話に先立ち行われるが、その適正な量は社会的文化的に規定されると考えられる。その情報量を見るために、ここではmoveという、発話の機能を担う最小の単位を使い、分析を行った。



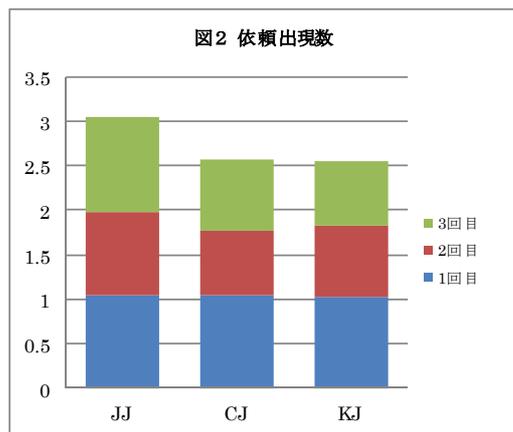
断りを挟んで3回の情報提供を見ると、JJ、CJ、KJ共に1回目の情報提供量はほぼ等しいことがわかる（図1）。日本語母語話者と学習者グループで差が見られるのは、2回目、3

回目の情報提供量である。JJ では、2 回目、3 回目はそれぞれ 1 回目の半分程度の量となっているのに対して、CJ、KJ の場合は、2 回目、3 回目も、1 回目とほぼ変わらず、日本語母語話者に比べると、情報提供量が多いことが窺える。

さらに、情報提供の move 間、そして、情報提供から依頼発話への繋がりを見たところ、以下のような差異が明らかになった。JJ では、情報提供の move 間は、「～が／けれども」「～て／で」等により、切れることなく一続きになっている場合がほとんどであるのに対して、CJ、KJ では、接続率が下がり、さらに CJ では、「～て／で」の使用が少なく、その代わりに「～ので／から」の使用が多くなっている。

② 依頼発話について

依頼が直接的に述べられる依頼発話においては、JJ は明示的に繰り返す傾向が強いが、CJ、KJ では、2 回目、3 回目の情報提供の後では依頼発話は必ずしも繰り返さず、情報提供だけで、相手にターンを渡すことが見られる (図 2)。

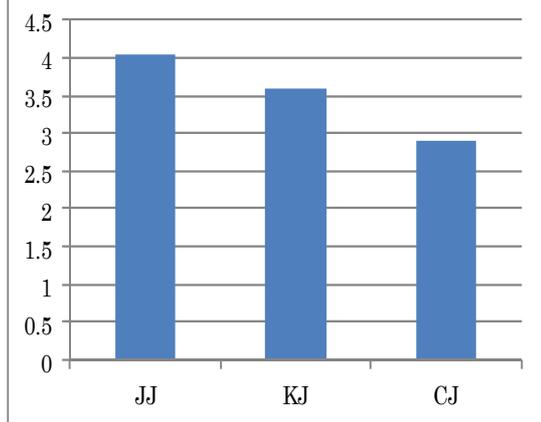


依頼発話の文末を、「疑問文 (～お願いできませんでしょうか) / 平叙文 (お願いします) / 言い差し (お願いしたいんですけども...)」に分類してみると、JJ では、言い差しの使用が 5 割弱となっており、疑問文がそれに続き、平叙文の使用は少ない。それに対して、CJ では、平叙文が最も多く使用され、その分言い差しが少なくなっている。KJ では、疑問文が多く、JJ ほどではないが言い差しも使われている。

次に、依頼発話を形態的に分析するために、使われている言語成分を比較した結果について述べる。「～していただけませんか」という依頼文の場合、[いただく／可能／否定／でしょう] という言語成分から成り立っていると考える。

3つのグループを比較すると、1つの依頼

図3 一つの依頼発話に使用される成分の平均数



発話中に使用されている成分の平均数は JJ が最も多く、CJ が最も少ない (図 3)。従って、やはり母語話者は、学習者グループより、多くの成分を含む長い文を生成していることがわかる。

JJ で多く使用される成分を挙げると、「んです・お願い・いただく・たい・伺う・と思う・可能・否定・でしょう」である。そうした成分と文末表現が組み合わせられて依頼発話生成される。しかし、CJ では、「んです・伺う・と思う・でしょう」といった、間接性を高める成分は使用数が少ない。KJ は、CJ より JJ に近い傾向を示しているが、やはり「んです・伺う」の使用は JJ ほどではない。一方、KJ では、「んです・ちょっと」、CJ では「ぜひ」の使用が JJ と比べて目立ち、しかも日本語母語話者の使い方とは異なるため、依頼の遂行に支障をきたす恐れがあるものが多い。

(2) 「遠慮・察し」の意識

「遠慮・察し」に関わる意識を明らかにするために、「遠慮・察しコミュニケーション尺度」を作成し、日本語母語話者への調査を実施した。また、中国語、韓国語、英語への翻訳を行い、各母語別グループに対しての調査を行った。その際、日本語学習者、および、長期の日本滞在経験者は除外した。

① 「遠慮・察しコミュニケーション尺度」

予備調査の結果から、尺度の改訂、教示のありかたを検討した上で、相互排他的な 5 因子 (I 他者の体面への配慮; II 予測される摩擦に対する方略; III 信頼に基づく対人関係の志向; IV 婉曲的なメッセージの理解; V メッセージの自己抑制) からなる「遠慮・察しコミュニケーション尺度」を構成した (全 20 項目)。尺度の信頼性の指標となる α 係数は 0.75 であった。また、因子モデルに基づく信頼性係数 ω は 0.83 であった。この心理測定尺度を用いて、日本人と中国人および韓国と

の比較を行った。

日本および中国における調査は、質問紙調査（自記式）による集合調査の形式で実施した。欠損値のない回答のみを採用し、それぞれ日本人322、中国人313を有効回答とした。一方、韓国における調査では質問紙調査に加え、インターネットを介した調査も行われた。事前にそれぞれの調査結果に有意差がないことを確認した上で41を有効回答とした。いずれの場合も6件法で回答してもらい、遠慮・察しコミュニケーションを支持する度合いを得点化した。

②日本人と中国人の比較

分散分析の結果から、日本人の遠慮・察しコミュニケーションを支持する度合いは中国人のそれより有意に高いと言える（表1参照）。一方、下位尺度をみると、その結果は様ではない。とりわけ、第I因子には有意差がなく、第III因子と第IV因子においては中国人サンプルの得点が有意に高い。

下位尺度において、「他者の立場への配慮」には有意差はない。また、「信頼に基づく対人関係の志向」と「婉曲的なメッセージの解釈」の得点は、中国人のほうが有意に高い。一方、下位尺度において日本人が有意に高い得点を示したものは、「予測される摩擦に対する方略」と「メッセージの自己抑制」であった。また、「予測される摩擦に対する方略」は、日本人から得られた結果では「他者の立場への配慮」、「メッセージの自己抑制」と有意な正の相関を示す ($r = 0.329 ; 0.396$) のに対し、中国人から得られた結果ではいずれの因子とも相関を示さなかった。日本人は摩擦を避けるためにメッセージを自己抑制するという可能性があることがこの点から考えられる。尺度の総合点では日本人がより高い点を示すことと合わせると、この摩擦を回避する意識が日本人の遠慮・察しコミュニケーションを特徴づける一因であると考えられる。

表1 日中の遠慮・察しの意識の違い

尺度	日本人 (n=322)		中国人 (n=313)		F値
	M	SD	M	SD	
第I因子 (他者の立場への配慮) 得点	22.60	4.11	22.68	3.09	0.09
第II因子 (予測される摩擦に対する方略) 得点	22.74	3.85	19.14	3.11	167.24 ***
第III因子 (信頼に基づく対人関係の志向) 得点	16.75	3.60	17.44	2.62	7.64 **
第IV因子 (婉曲的なメッセージの理解) 得点	11.43	2.89	12.51	2.15	28.49 ***
第V因子 (メッセージの自己抑制) 得点	11.34	2.76	10.31	2.55	23.68 ***
遠慮・察しコミュニケーション尺度得点の合計	84.85	10.15	82.08	8.45	13.89 ***

注) ***は $p < 0.001$ 、**は $p < 0.01$ を表す。

③日本人と韓国人の比較

表2は、日韓の遠慮・察しコミュニケーション尺度の得点の比較である。まず尺度の合計点の差は有意ではなかった。この結果から、尺度の合計点においては、日本と韓国で遠慮・察しコミュニケーションを支持する度合

いに差がないと言える。

下位尺度を見ると、第I因子を除くすべての下位尺度において有意差があった。まず第II因子においては日本人の平均点が有意に高い。第III因子においては、韓国人の平均点が有意に高く、第IV因子も韓国人の点が有意に高い。そして、第V因子では、日本人の点が有意に高かった。このように、下位尺度の得点を比較すると、その傾向は様ではなく、両者に差がありながらそれぞれが相殺し合い、尺度全体においては差がないという結果になったと考えられる。

第II因子「予測される摩擦に対する方略」と第V因子「メッセージの自己抑制」では、日本人の点が有意に高い点は、中国人との比較結果と首尾一貫し、日本人の特徴の一つとして摩擦の回避とメッセージの自己抑制がより重視されていることが示唆される。

表2 日韓の遠慮・察しの意識の違い

尺度	日本人 (n=322)		韓国人 (n=14)		F値
	M	SD	M	SD	
第I因子 (他者の立場への配慮) 得点	22.599	4.111	22.244	3.412	0.281
第II因子 (予測される摩擦に対する方略) 得点	22.736	3.853	18.415	3.301	47.145 **
第III因子 (信頼に基づく対人関係の志向) 得点	16.745	3.599	18.780	2.475	12.352 **
第IV因子 (婉曲的なメッセージの理解) 得点	11.429	2.892	12.561	2.324	5.803 *
第V因子 (メッセージの自己抑制) 得点	11.339	2.757	10.195	2.492	6.384 *
遠慮・察しコミュニケーション尺度得点の合計	84.850	10.145	82.195	8.376	2.578

注) *は $p < 0.01$ 、**は $p < 0.05$ を表す。

③「依頼」に対する意識と「遠慮・察し」

「依頼」に関わる意識についても質問項目（全6項目）を作成し、「遠慮・察し」調査と同時に調査を行った。日本人と中国人への調査結果の分析を行った。

依頼に対する意識のうち日中で有意差が見られたものは6項目中3つあり、いずれも日本人の得点のほうが高かった（表3）。

表3 日中の依頼と「遠慮・察し」に対する意識の差

依頼に対する意識 (i~vi) と「遠慮・察し」		標本数	平均値	標準偏差	F値	
i 依頼をしたい時はまず相手が引き受けてくれそうかどうかを探る。	日本人	322	4.64	1.14	0.875	
	中国人	313	4.72	1.16		
ii ある程度相手に負担のかかる依頼をすることは、人間関係を悪くする可能性がある。	日本人	322	3.91	1.18	0.021	
	中国人	313	3.92	1.17		
iii 私は、相手にある程度負担がかかることは、相手にできそうなことでも依頼しにくい。	日本人	322	4.46	1.21	16.258 ***	
	中国人	313	4.09	1.06		
iv 私は、相手からある程度負担のかかる依頼をされた時、申し訳ないと思わずに断ることができる。(逆)	日本人	322	4.35	1.17	0.399	
	中国人	313	4.29	1.10		
v 私は相手からある程度負担のかかる依頼をされた時、直接的な言い方で断ることができる。(逆)	日本人	322	4.37	1.20	6.471 **	
	中国人	313	4.14	1.02		
vi 相手からある程度負担のかかる依頼をされた時、それを断ることは人間関係に影響を与えないと思う。(逆)	日本人	322	3.87	1.19	16.562 ***	
	中国人	313	3.50	1.04		
「遠慮・察しコミュニケーション尺度」(20項目)の得点		日本人	322	84.85	10.15	13.891 ***
		中国人	313	82.08	8.45	

注) ** F値が1%水準で有意(両側)であることを表す。

*** F値が0.1%水準で有意(両側)であることを表す。

また、日本人回答者においては、依頼に対する意識は、依頼をする際・断る際ともに遠慮・察しコミュニケーション尺度の結果と正の相関を示したが、中国人回答者においては、

相関を示さないものも見られ、特に依頼を断る際の意識との間には相関がなかった(表4および表5)。これらの結果から、日中の依頼に対する意識の差の一つは、依頼を断る際に遠慮・察しの意識が働くか否かにあることが考えられる。

表4 日中の依頼と「遠慮・察し」の意識との相関(1)

依頼に対する意識(i~iii)と遠慮・察し	依頼をする際の意識		
	i	ii	iii
日本人(n=322)	.384**	.217**	.321**
中国人(n=313)	.352**	.223**	.245**

注) * 相関係数が5%水準で有意(両側)であることを表す。
** 相関係数が1%水準で有意(両側)であることを表す。

表5 日中の依頼と「遠慮・察し」の意識との相関(2)

依頼に対する意識(iv~vi)と遠慮・察し	依頼を断る際の意識		
	iv	v	vi
日本人(n=322)	.356**	.378**	.289**
中国人(n=313)	0.094	.198**	-0.078

注) * 相関係数が5%水準で有意(両側)であることを表す。
** 相関係数が1%水準で有意(両側)であることを表す。

(3)まとめと展望

上記のように、日本人の依頼の言語行動に見られるいくつかの特徴、例えば、情報提供量が比較的少なく、依頼発話の間接性が高いというような点は、「遠慮・察し」に関わる意識の中で、日本人の特徴である、「予測される摩擦に対する方略」「メッセージの自己抑制」に繋がっていると考えられる。

今後は、さらに学習者の意識と言語表現がどのように結びついているかを検討するとともに、今回明らかになった「依頼を断る際の意識と遠慮・察しの意識の関連」に関して、母語グループ別の検討を進める必要がある。そうした母語別の学習者の発話の特徴を蓄積し、日本語教材の開発の基礎資料とすることによって、円滑なコミュニケーション教育のための一助としたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①小山慎治、池田裕、「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成、異文化コミュニケーション研究、査読有、第23号、2011、21-46
- ②小山慎治、試作版「遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成、多摩留学生教育研究論集、査読有、7号、2010、39-44

[学会発表] (計5件)

- ①小山慎治、池田裕、三好理英子、笠原ゆう子、遠慮・察しコミュニケーションに関する比較研究—日韓の大学生を対象とした質問紙調査から—、韓国日本語学会春期学術大会、2013年3月23日、於東国大学、ソウル、韓

国

- ②小山慎治、池田裕、三好理英子、笠原ゆう子、池田智子、日中大学生の「依頼」と「遠慮・察し」に関する調査、第9回国際日本語教育・日本研究シンポジウム、2012年11月25日、於香港城市大学、香港、中国

- ③小山慎治、池田裕、三好理英子、笠原ゆう子、池田智子、遠慮・察しコミュニケーションに関する比較研究—日中の大学生を対象とした質問紙調査から—、日本語教育国際研究大会名古屋2012、2012年8月19日、於名古屋大学、名古屋

- ④小山慎治、遠慮・察しコミュニケーション尺度」の作成—異文化間比較調査に向けて—、多文化関係学会第10回年次大会、2011年9月17日、於青山学院大学、東京

- ⑤小山慎治、池田裕、遠慮・察しコミュニケーション尺度作成の試み—試作版尺度による予備調査と構成概念の再検討—、日本コミュニケーション学会第40回記念次大会、2010年6月19日、於明治大学、東京

[図書] (計1件)

- ①小山慎治、春風社、異文化コミュニケーション事典、遠慮と察し、2013年、393-394

[その他]

ホームページ等

<http://www.fedu.uec.ac.jp/~iked/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 裕 (IKEDA YUTAKA)

電気通信大学・国際交流センター・教授
研究者番号: 60184438

(2) 連携研究者

竹田 (笠原) ゆう子 (TAKEDA YUKO)

電気通信大学・国際交流センター・教授
研究者番号: 40282925

(3) 連携研究者

池田 智子 (IKEDA TOMOKO)

桜美林大学・歴史言語文化学系・准教授
研究者番号: 00232190

(4) 協力研究者

小山 慎治 (KOYAMA SHINJI)

電気通信大学・国際交流センター・非常勤講師

三好 理英子 (MIYOSHI RIEKO)

電気通信大学・国際交流センター・非常勤講師